

インターナショナルスクールでの図書館実習を経験して

瀧上 幸子（文学部文学科日本文学専修）

はじめに

私は昨年9月2日から13日に、東京・市ヶ谷にある Chiyoda International School Tokyo（以下 CHIST）のリソースセンターで、2週間の図書館実習を行わせていただきました。CHIST は司書教諭課程で兼任講師をされている青山比呂乃先生がお勤めになられている学校で、私は昨年、青山先生の「学習指導と学校図書館」を履修しており、それがきっかけとなり実習をさせていただくことになりました。私は来年度から文学研究科教育学専攻へ専攻を変えて進学し、教育学の視点から学校図書館の研究を行います。その研究という道を選ぶ際にも大きな影響を与えてくれた実習でした。よって本稿では、インターナショナルスクールでの図書館実習で経験したことや、それらを通して考えたことについて述べていきます。また私は図書館実習の3ヶ月前に教育実習を経験しており、図書館実習が同じ学校現場での実習であったことから、そこで得た反省点を図書館実習に生かしました。司書教諭コースのほとんどの方は教育実習に行かれると思いますので、参考になればと思い、教育実習での反省についても本稿で述べています。従って本稿は、学校図書館での実習、又は教育実習を予定されている方に参考になるかと思いますが、そうでない方も私の1年間の試行錯誤について、気軽に読んで頂ければ嬉しいです。

図書館実習参加の動機と CHIST を選んだ経緯

本学の図書館実習では、自分が実習をしてみたい館を選びます。そのため司書課程で学んでいく中で芽生えた、自分の図書館情報学に対する興味関心や問題意識を今一度振り返り、どのような図書館で実習を行いたいと考え、実習館を選択する必要があります。私もそれらについて振り返りながら実習館を決めました。そこで、まずは私が学校図書館に興味を持ったきっかけと、実習館に CHIST を選んだ経緯について述べていきます。

私は学校図書館で、専任の司書教諭と教科教員が協働して行う探究型学習がカリキュラムに埋め込まれた学校に通っていました。ですから主に Big6 プロセスを用いた探究型の授業を学校図書館で受けた経験があり、学校図書館が生徒の探究活動には欠かせない存在であることは司書教諭コースの授業を受ける前から知っていました。正直に申しますと、当時の自分は、調べ学習は効率的に早く終わらせたいと思ってしまうタイプで、探究という行為自体を心から楽しむことが出来る生徒ではありませんでしたが、通常の教室での授業とは違って自分の興味に基づいて問いを立てることや、自分のテーマに沿った文献に目を通したりすることは面白いと感じていました。高校生の時に古典の授業が好きだった私は、国語科の教員免許を取りたいと思い、高校卒業後、立教大学の文学部文学科日本文学専修に進学しました。そのタイミングで司書教諭コースの履修も始めましたが、最初は司書教諭の資格は教員免許状に加えて取っておいたほうが、教員採用試験や就職活動の際に有利に働くだろうと思っていた程度で、とりわけ司書教諭という仕事に強い関心を持っていた訳ではありませんでした。しかし、司書教諭コースの授業を受けていく中で、学校図書館が生徒の興味関心を引き出せる場所であること、司書教諭は学びの「共同探究者」(ファシリテーター)であること¹⁾を知り、自分も生徒一人一人の探究活動を、図書館資料等を用いることによって促すことができる教員になりたいと思うようになりました。ちなみに、学校図書館の運営が出来るようにな

るためには司書の免許も必要であるという先輩の助言を受け、学部3年次から司書課程の科目も履修しています。そして、国語科の教員として実習を行う教育実習とは別に、学校図書館専門職という立場での実習を経験してみたいと思うようになり、図書館実習への参加を決めました。以上が学校図書館に興味を持ったきっかけと、実習参加の動機です。

以上に述べた通り、私は学校図書館を利用した教育は経験したことがあるため、自分が経験したことのないような教育を行っている学校図書館で実習をしたいと考え、実習館（校）を探すことにしました。そして丁度実習校を探している時期に、青山先生の授業、「学習指導と学校図書館」の一環で、実際にCHISTに伺い、リソースセンターの授業を見学させていただく機会がありました。その時に拝見させていただいた、国際バカロレア（以下、IB）の特徴である対話形式で進められる授業や、BYOD化された授業の様子を見て、ここで実習をさせていただいたら、自分が経験したことのないIBの教育に触れられるかもしれないと心惹かれました。それと同時に、私自身がインターナショナルスクールに通った経験はないため、日常的に英語が交わされる国際的な教育現場や、日本語と英語の両言語の資料を取り扱う学校図書館の運営の仕方を知りたいとも思いました。これらが動機となり、青山先生にご交渉させていただいたところご快諾くださり、CHISTのリソースセンターで実習させていただくことが決まりました。

教育実習の反省点を生かす

図書館実習を迎えるにあたり、私が最も留意したのが教育実習の反省を生かすということです。前述した通り、私は教職課程を履修していたため、6月に国語科の教育実習生として、3週間の教育実習を母校で経験しました。図書館実習では、自分の立場は国語科教員から学校図書館員へと変わりますが、同じ学校現場での実習であり、教職員の一員として生徒と関わります。よって、教育実習の反省を生かすことを心がけて実習を行おうと決めました。本稿は司書課程紀要の原稿のため実習内容について詳しくは述べませんが、教育実習を終えた時点で、ここには書ききれないほどの沢山の反省点が残りました。主に司書教諭コースの方の参考になればと思い、ここで教育実習の反省点を述べていきます。私の教育実習の反省点は主に大きく二つに分けられます。一つ目は、国語科教員としての立場と司書教諭としての立場が混乱したまま実習を行なったことです。前述した通り、母校は学校図書館が充実しているため、司書教諭コースの学びも教育実習に生かしたいと考えた私は、司書教諭の方にご了承をいただき、担当した単元に関係したコーナーを作らせていただきました。しかし、自分の授業のどこにその資料を用いるのか等、そのコーナーを目的や意図無しに作ってしまった為、自分の授業に全く生かすことができませんでした。また、国語科の教員は、文学作品の解釈や良さを第一に教えなければいけないとご指摘を受けた時に、自分の授業では、そのような教科としての明確な意図が無いまま、探究のみを意識した活動を入れてしまっていたことに気づきました。今振り返ると、自分が展開した学習活動に、国語科教員（教科教員）としての意図が存在していなかったと思います。実習前に自分の立場を明確に出来ていなかった点について、本当に反省しました。司書教諭コースの授業は少人数のため、対話形式で授業が進められたり、ブックトークを作ったり、生徒の立場になってプレゼンテーションを作成したりと、実践を通して学ぶ授業がほとんどです。そのため、司書教諭コースの皆さんの中には、実際に教育実習で学校図書館を使いたいと考える方もいると思います。しかし、実習校の教職員の方は、お忙しい中、皆さんを〈教科教員〉として受け入れてくださっています。まず、教育実習中は指導案作成など、自分の教科の仕事に集中することを優先してく

ださい。そして、もし授業で図書館の資料を使うことを考える場合は、その資料を使うことによって本時にどのような効果を期待するのか、指導案を作成する段階から目的を明確にして行ったほうがいいです。実習中の自分の立場はどのようなもので、どう振る舞うべきなのかということについて、自分の中で明確にしてから、生徒や教職員の方と関わっていく必要があることを教育実習で学びました。二つ目は積極的に生徒や周りの教職員の方と関わる姿勢が足りなかったことです。実習期間という限られた時間の中では、こちらから生徒に積極的に心を開き、関係性を築いていかなければ、十分な信頼関係を築くことができません。また、生徒と信頼関係を得るためには生徒の情報を得る必要があります、そのためには学年の先生方などに積極的に質問する姿勢が不可欠です。私は実習が進むにつれ、指導案作成などの、目の前の膨大な仕事をこなすことで頭が一杯になってしまい、周りを見る視点や気持ちの余裕が欠けてしまいました。この点に関して、深く反省しました。

以上の反省点を元に、図書館実習で心がける点を二つ決めました。一つ目は、自分の立ち位置を実習前に明確にすることです。今回は国語科教員としてではなく、学校図書館員として子供達に接します。教育実習同様、同じ学校現場での実習になりますが、その役割の切り替えを大切にしようと思い、学校図書館員として子供達にどのような言葉をかければいいのか、どのような態度で接したらいいか、実習前に考えるようにしました。二つ目は生徒、教職員と積極的に関わり、リソースセンターの利用者のことをよく知ることです。校舎内ではインターナショナルスクールのため、日本語の時間以外は原則英語でコミュニケーションをとります。私はバイリンガルではないですし、英語圏の学校に本格的に留学した経験もありません。ですから完璧な英語で対応は出来なくても、積極的に英語で交流する努力をしようと思われ、実習に臨みました。また、リソースセンターは全校生徒がやってくる数少ない場であるから、なるべく顔と名前を早く一致させて名前で呼ぶようにしたり、自分から興味を持って話しかけたりすることを意識しました。このように、実習で得た反省材料を生かせるときは必ず訪れます。何かに取り組まない以上、反省材料は生まれず、次の経験に繋げることも出来ません。教育実習終了後は悔しい思いで一杯でしたが、これらの反省点は私にとって大きな〈学び〉となり、図書館実習で生かすことが出来ました。ですから、これから図書館実習のみならず、教育実習に行かれる方も、失敗を恐れず、「まずはやってみる」という姿勢で挑戦して欲しいです。

図書館実習の内容について

ここからは図書館実習で経験したことについて述べていきます。CHISTのリソースセンターは7:30に開館するため、それまでに登校し、開館業務を行いました。7:30を過ぎると生徒たちが続々とやってきます。この学校は8:05にならないとHRの教室に移動できないため、生徒たちは登校したら、まずリソースセンターに来ます。リソースセンターは学校の入り口のすぐ左に位置していることもあり、生徒たちにとって学校の玄関のような存在です。この時間に本の貸出返却をする生徒が一番多く、朝はその処理に追われました。一度に何人もの子供達が「Borrow!」「Return!」「Keep!」とカウンターに押しかけてきて、慣れるまでは、誰がどの本を返し、借りて行ったのか分からなくなったりしました。後は雑談をしたり、OPACと一緒に操作して資料探しを手伝ったりします。また、保護者の方もお子さんを送り迎えに来られた際に利用されます。保護者の方のレファレンスや読書相談の対応も行いました。

そのあと授業が始まりますが、ここからは、授業があるときは授業に入り、授業が無いと

きは登録、配架など図書館の運営業務を進めます。これから仕事内容について、司書的な業務と教諭的な業務に分けて説明していきます。まず司書的な業務では、登録、配架、蔵書印の捺印、ブッカー掛け、新着本の展示、Overdue Notice（督促状）の作成と配布を経験しました。CHISTのリソースセンターには英語と日本語の資料の両方があり、洋書は「Follett Destiny」、日本語の資料はキハラの「Egg」という異なるシステムで管理しています。それらは異なる順序で操作をしなければならず、慣れるまで苦労しました。また、「SAKURA MEDAL」という日本の学校でいう課題図書のようなものが10月から新たに変わるというタイミングで、それに間に合うように登録から配架まで進めなければならず、忙しかったです。また日本語の本はNDC、洋書はDDCと言語で分類が分かれており、主題が同じものが隣り合って配架されています。（例えばNDCの8類とDDCの4類が同じ棚です）。NDCは情報資源組織論で覚えましたが、DDCは覚えていなかったためこちらも慣れが必要でした。

教諭的な業務では、情報活用指導の補佐や、英語の絵本の読み聞かせを経験しました。低学年の調べ学習に関わった時は、ポプラディアネットやブリタニカオンラインを生徒がうまく使いこなしているか様子を伺い、手が止まっている生徒には助言をしたりしました。また、6年生の漫画批評ポスターの講評に参加させていただき、青山先生と私で、情報リテラシーの面から生徒のポスターの講評をしました。私は高畑勲監督の言葉と自分の意見の境界線を引けていない生徒に、「監督の意見と自分の意見は分け、監督の言葉をどこから引いたのか、引用源を明確にしたほうがいい」と伝えることが出来ました。以上のような情報活用指導を経験して、教育実習での国語科教員としての立ち位置とは違う、司書教諭としての立ちふるまいや指導方法を学ぶことができました。読み聞かせは2年生に「Rainbow Fish and the Sea Monster's Cave」を読みました。様々な種類の魚が登場するため声色を変える点など、留意点は多々あったのですが、英語での読み聞かせは初めての経験だった上、いざ自分より英語を正しく発音する子供達を前にすると緊張してしまい、ただ必死さだけが伝わったものと思われまふ。青山先生のような子供を惹きつける読み方ができるようになるまでは慣れが必要であることを実感しました。また、低学年では授業中に本の取り合いなどのトラブルがしばしば起こります。生徒間のトラブルが起こったとき、英語でどう対応すればいいのか頭の中でシミュレーションをしていますが、咄嗟に目の前でそのようなことが起こると中々言葉が出て来ません。英語での声かけの難しさも感じました。

実習最終日にはインターナショナルスクールの Librarian や教員が一齐に集まる会議、「Librarians in Japan fall meeting」を、運営されている先生方のご好意により見学させていただきました。その会場となった K. International School Tokyo は、CHIST とは違う日本の伝統的な校舎の作りで、インド系の生徒が多い様子や韓国語やロシア語の絵本がある点など、実習校とは違う点を見ることができました。会議は学校図書館の運営方法などについて、ハイレベルな議論がかなりのスピードで展開されていて、私が持っている知識や英語力で議論についていくのは難しかったですが、様々な国の Librarian や教職員の方たちが、それぞれの国の訛りを含んだ英語で活発に意見を出し合い、「SAKURA MEDAL」を自治的に運営されている様子が印象に残りました。また昼休みに他校の英語の先生方や Librarian の方と交流させていただくことが出来ました。英語で交流するのはかなり緊張しましたが、インターナショナルスクールの学校図書館教育や英語教育について直接お話を伺うことができ、中には「今度私の学校図書館に遊びに来ない？」と言ってくださる先生もいらして、この異文化交流を通して自分の視野が広がっていくことを実感しました。そして、いつかは

ここにいる人達が使っている文脈で学校図書館について理解できるようになりたいと思うようになり、語学学習のモチベーションを上げることが出来ました。本当にこのミーティングでは、沢山の刺激を受けることができました。

実習を経て－これからの学校図書館員の役割とは－

私はインターナショナルスクールという自分が経験したことのない教育現場で図書館実習を経験して、自分の中に新たな学校図書館像を築くことができました。そして、IBの先進的な教育方法や国際的な現場を目の当たりにしたことで、これからの学校図書館や学校図書館専門職の役割は何か、今まで以上に具体性を持って考えるようになりました。特に私は学校図書館員のこれからの役割の変化について興味を持っているため、最後に、BYODとグローバル化の観点から、今私が予想している学校図書館員の役割の変化について述べていきます。

まず、図書館実習で出会った生徒たちは、自分のiPadを持っていました。そのため授業中はノートと鉛筆はほぼ使わず、端末内で作業が進められます。教員も板書はせず、ウェブサイトの画面を電子黒板に写して説明します。そのようなICT中心の環境を私たちの世代は先進的と考えてしまいましたが、Society5.0時代を生きるこれからの子供達にとっては、当たり前前の環境になっていくのでしょうか。リモートアクセスなどのネットワークの発達、或いはクラウドの発達により、図書館に来なくても割と充実したデータベースにアクセスできる世の中になってきている今、学校図書館員の役割はどのようなものになるのでしょうか。実は、最近私はボランティアで、とある高校の総合的な探究の時間にアシスタントとして関わるようになりました。その学校でも、調べ物は主に生徒のパソコン上で行われ、今の所、図書館は使われず進んでいます。その様子を見ていて、どうすれば有益な情報源を導くことができるのかこちらが示さないと、生徒の探究活動はただのネットサーフィンで終わってしまい、漫然としたものになっている気がしています。ごく当たり前のことを述べますが、生徒が用いる情報源が紙媒体からインターネットのデータベース上に移っても、生徒が有益な情報源にたどり着けるように導くことが、これからの学校図書館員の役割なのだと感じます。

また、両言語でのレファレンスなどが行われる国際的な現場での実習を経て、学校図書館員が教育のグローバル化にどう貢献していくのかということについて関心を持つようになりました。実際に、IBと学校図書館の関係について研究したAnthony Tilkeは「Supporting international mindedness should be a major focus of an IB library.」²⁾と、

「international mindedness」(文化や考え方の違いを認め、受け入れることができる国際的視野)を支援することが、学校図書館の重要な役割であることを、IBの基準が定めていると指摘しています。グローバル化に伴い、知識に国境が無くなり、私たちをとりまくメディアが複雑化している現在、生徒たちはそれらに自由にアクセスし、気軽に多様な価値観を得ることができます。現代のインターネットは多様な情報が溢れており、まさにボーダーレスな世界です。そして、現代の生徒たちがそれらから受ける影響は、私たちが小中高時代に受けてきたものとは比較にならない程、大きいのであろうと予測されます。そこでこれからの学校図書館員は、そのようにデータベースやネットワークが多様且つボーダーレスなものになっても、生徒が情報活用を行えるように指導していく必要があるのではないかと実習を経て感じており、その点によって教育のグローバル化に貢献していくのではないかと考えています。例えば学校図書館員が、英語等のデータベースを用いたリテラシー教育や、クリティカル・シンキングの指導をする時代になってくるのかもしれませんが。私は特にTilkeのいう

「international mindedness」と学校図書館の関係について興味を持っているため、修士課程ではそれらについて考察をしていこうと考えています。

おわりに

以上に述べた通り、私は教育実習と図書館実習を通して、教育や学校図書館について今まで以上に深く思考を巡らすことが出来ました。特にインターナショナルスクールで実習をさせていただいたおかげで、これからは国際的な視点や文脈から学校図書館について考えられるようになりたいという目標が出来ました。ちなみに、最終学年の1年間で二つの実習をすることが出来たのは、私の進路活動の山場が9月後半から11月にかけて行われた院試期間であり、夏に本格的な就職活動をしなかったから実現できたのだと思います。二つ実習をすると、もちろん実習に向けての書類作成や、事前指導と事後指導、事後レポートがそれぞれで課されるため、それなりの労力を費やすことになったのですが、学校図書館が充実した2現場での教科教員、学校図書館員としての実践経験は、特に教育や学校図書館について問題意識を持って学んできた私の大学生活の集大成となり、忘れられない経験になりました。これからの学校図書館の研究に、これらの実習で得た経験を存分に生かしていきたいと思っています。

最後に、学び多き実習が実現できたのは、図書館実習でお世話になりました青山比呂乃先生、CHISTの教職員の皆様、そして教育実習でお世話になりました母校の教職員の皆様のお陰です。この場をお借りしまして御礼申し上げます。二つの実習を経験したことで、なにより私自身が成長することができたと感じています。そして貴重な実習の機会を下さった司書課程の中村百合子先生、ハモンドエレン先生、学校・社会教育講座事務室の皆様、ありがとうございました。来年度から学校図書館の研究を本格的に始めていきますが、私たちをとりまく生活環境、又は日本の教育観が大きく変わろうとしているこの時代、良い意味でも悪い意味でも学校図書館の存在意義や、学校図書館員の専門職性が問われています。あえて、そんな時代に研究が出来ることを楽しみに思います。大きな示唆を与えてくれた実習経験を無駄にしないように、修士課程に進んでも前向きに様々なことに挑戦し、2年後の進路につなげていきたいです。

-
- 1) 河野哲也「第3章 これからの学校教育とあるべき学びの姿」中村百合子編『学校経営と学校図書館』樹村房, 2015, p.35.
 - 2) Tilke, Anthony. The International Baccalaureate Diploma Program and the School Library. Libraries Unlimited, 2011, p.93.